

2010年産米の品質低下と登熟期の気温

～2010年は晩生品種でも品質低下～

1. はじめに

2010年の夏は記録的な猛暑で、気象庁も夏の平均気温は、1898年以降の113年間で最も高くなったと報告している。

2010年の水稲作は、台風の発生・襲来ともに少なく、日照も比較的多かったことから、作況は99と平年並みであったが、夏期の高温による玄米品質の低下が顕著であり、全国的な問題となった。

2. 和歌山県の2010年産米の品質

県内の2010年産米の品質については、1等米比率で20.4%と過去10年間(平均35.5%)で最低の結果となった(農政事務所報告)。この品質低下の原因については、検査における2等以下への格下げ理由をみると、心白粒・腹白粒・背白粒等の白未熟粒の発生が47.5%で半数近くを占めていた。その他の整粒不足(17.8%)やカメムシによる被害(12.4%)は概ね例年と同様であり、やは

り登熟期の高温による影響が大きかったものと見られる。

3. 登熟期の気温

図1に和歌山市における8月から9月までの平均気温の推移を示した。2010年産米の登熟期の気温は、例年にくらべ常に高く推移し、その状況は9月中旬ごろまで続いた。

2010年産米は、これまで比較的品質が安定していたヒノヒカリなど成熟の遅い品種において品質の低下が目立った(表1)。一般的に登熟期(特に出穂から出穂後20日ごろまで)の日平均気温が27℃を超えると背白粒など白未熟粒の発生が増えるとされている。例年であれば8月中旬ごろから緩やかに気温が下がり始め、9月中旬ごろには平均気温が25℃程度となるため、晩生品種は登熟期に高温の影響を受けにくかった。しかし、2010年の平均気温は例年より2℃程度高く推移し、9月中旬ごろまで30℃近い高温が

続いたことから、ヒノヒカリなど成熟が遅い品種まで品質が低下したと考えられる。

4. おわりに

登熟期の高温による玄米の品質低下は、近年大きな問題となっていることから、引き続き高温に強い品種の検討(奨励品種決定調査)や、栽培方法の検討など、対応策を検討していきたい。

(栽培部 足立裕亮)

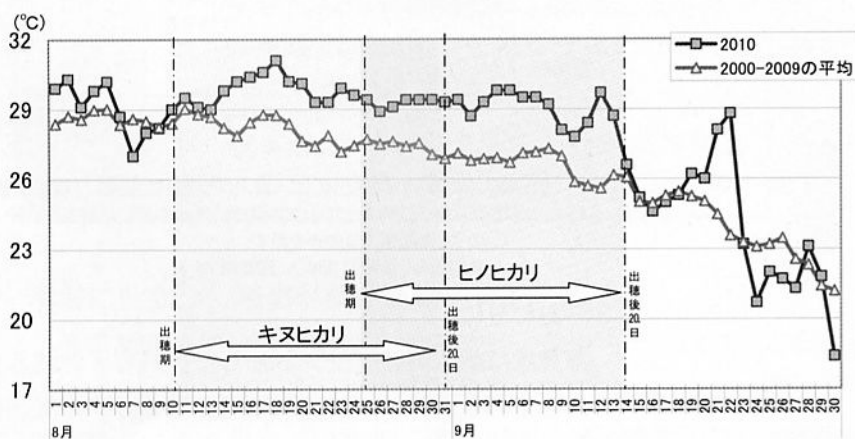


図1 日平均気温の推移(2010年、2000-2009年の平均値)

注) 気象庁 AMeDAS 和歌山市のデータを集計し作成
出穂期は県奨励品種特性表を参考に作成

表1 和歌山県における2010年産米の県奨励品種別の検査等級内訳

品種	ハナエチゼン		イクヒカリ		キヌヒカリ		ミネアサヒ		日本晴		ヒノヒカリ	
	H22	平均	H22	平均	H22	平均	H22	平均	H22	平均	H22	平均
1等	34.9	40.9	32.8	36.6	20.4	36.3	19.5	35.1	3.1	29.3	9.8	44.0
2等	54.1	51.1	58.7	55.5	67.9	58.4	59.5	55.7	63.8	65.4	74.6	47.9
3等	8.8	7.1	7.7	7.3	9.6	4.7	19.2	8.4	31.9	4.3	13.9	7.6
格外	2.3	1.3	0.8	1.0	2.1	0.7	1.9	1.2	1.2	0.7	1.7	0.7

注) 農林水産省調査報告を集計

平均は2003年から2009年の平均値(イクヒカリは2006年から2009年の平均値)